



2012・10

SORA 45号

稲の花

柴田 佐知子

神殿を照らしてゐたる桜鯛

思ひ出のところどころに犬ふぐり

鮎上る色となりたる故郷かな

祀られし岩隆々と夏来る

青空を山なみ走る更衣

本堂に集まつてゐる梅雨畳

沈むごと母は眠りぬ緑の夜

はじめより身一つ衣更へにけり

愛されて爪とぐ猫や桐の花

ひるがへる金魚を置いて会ひにゆく
落ちさうな岩ごと崖の灼けてをり
信者なき神は滅びて椽の花
羽抜鶏頸を絞めよと身を反らす
無きことにして真夜中の髪洗ふ
ゆく末はもうそのあたり心太
涼しくて老いたることを笑ひ合ふ
蛇死して正しき長さ曝しけり
金剛の瀧に行者が割り込めり
限りなく救ひて神も暑からむ
人来ねば神鈴鳴らず蟻地獄
今生を見遣りて父の夕端居

小鳥来る 高倉和子

返答に否応もなき蟬時雨

心太女ばかりが外に出て

良き音を立てて爪切る今朝の秋

一舟の川を渡れる秋気かな

芋の葉を滅多打ちして雨上がる

残骸となりし田畑や秋の雲

他愛なき母との会話小鳥来る

葉鶏頭山の裏より雲動く

浮遊 中田みなみ

船遊び救命胴衣椅子の下

仏ヶ浦・恐山五句

たましひの浮遊に入りし夏鴉

天炎えてただの岩なる仏岩

夏風邪のいよよ妖しき瞽女のこゑ

黒南風や借り船戻る仮波止場

菩提樹の人散りばめて咲きにけり

噴水や彼方となりし敗けいくさ

まづまづの晩年玉葱に泪し

無蓋車

荒井千佐代

一人称

服部早苗

黴の世の生ある限り生を詠む

魚を煮る匂ひ立ち込め半夏生

蜘蛛の囀に一と日潮風潮鳴りも

喪の百合や奏者席にて眼鏡拭き

涼しかりけり死に方を論ずれば

いま西日涉り終へたる被爆川

ちちかもしれぬ母の忌の秋螢

無蓋車に豚のひしめく草の花

まるまると赤子戻りぬ盆の家

いなびかり人にも会はずポストまで

風の無き日暮よ線香花火しよ

西瓜切る姉となりたる幼子に

短夜をころがしてゐる眠りかな

しかうしておのが重さに桃傷む

夏逝きぬ茜に空を染めあげて

月光に一人称として櫂

出窓 柴田志津子

蚯蚓鳴く だいじみどり

終業の灯を消す梅雨の町工場

まつすぐな一本道の道教へ

小児科の出窓に久し金魚玉

写真など捨ててしまへと蚯蚓鳴く

竹林の奥に水鳴る帰省かな

鏡見る裸の胸をじつと見る

荒梅雨の疵あと深き幾山河

大岩の坐つてをりし滝の前

逆茂木の等間隔を蟋蟀とぶ

倒木を適当に切る夏休み

秋鯖のいろを信じて買ひにけり

新米へ米櫃の糠落としけり

草の香や少年にはや力瘤

歩きけり白雨のしづく垂らしつつ

新涼や遊具の船は空も飛ぶ

新聞をひらけば火取虫もくる

千葉 原 友 子

開墾の沖は銀河に濡れゐたり
あかつきの茄子の貴き紫紺かな
夏薊鬼女の紅筆かもしれぬ
蠨螋の柱沸騰してゐたる
裏おもて無きはよかりし蠅叩き

大阪 田 岡 千 章

赤玉は常備丸葉梅雨明ける
ふたり居のまこと密やか葭簾
しやらくせい麩喰ふに銀の匙
はつたいに噎せてむかしの僕がゐる
竹匙のいよよ古る艶こがし練る

糸田 宮 井 知 英

風入や手擦れ激しき俘虜日記
終戦日田は青々と広がりて
白も又燃ゆる色なり酔芙蓉
諦観も羨望も無し障子貼る
青桧葉の貼り付いてゐる茸かな

福岡 あ さ な が 捷

ひとりづつ逝きてひとりに蚊帳吊手
鬼灯や実らぬ恋は色褪せず
万灯の傾ぎ正して離れゆく
紅葉山阿畔の像は雲に立つ
散りもみぢ案内板をとばし読み

福岡 矢野百合子

山笠男お汐井浜へ帯なして

帰省子の校歌の山河仰ぎをり

金灯笼のせて踊り子できあがる

千の灯の渦とぼりゆく踊りかな

千灯笼踊りに浮けり宮の森

吉井 高倉恵美子

村中の人の集まる魂送り

納得のゆかぬ入院夜の雷

五時に来る病院食や秋暑し

病人はみな仲良しや鳳仙花

芋の露集めしことも遙かかな

粕屋 秋 千 晴

水草も付けて目高を分ちけり

あめんぼはいつも輪の中脚立てて

花氷みんなが触はりつるんつるん

親も子も本を借りたる夏休み

下駄の緒の馴染みし頃に夏終る

福岡 亀井紀子

秋立つや羽搏き強き鳥の群れ

山々に雲のまたがる九月かな

惨殺の絵巻広げり寺の夏

置き捨てし家も稲田も闇の中

手品師の細き指より秋の色

長崎 鳳 蛮 華

相づちを打つ風鈴と思ひけり
滝しぶき対岸に来て駆け登る
気まぐれな雲が裾ひくお花畑
かなぶん飛ぶ拋物線の半ばより
艦を押し舳をまねく大夕焼

粕屋 吉 田 律

神の山斜めに歩き蕨狩
一族のどこか似てをり瓜の花
顛顛に耳の字多し蝉しぐれ
起き上がる無数の眼毛虫焼く
勉強ぎらひ運動ぎらひ甲虫

山梨 野畑 さゆり

白靴や絵地図にめぐる殉教碑
富士快晴三日三晩の梅むしろ
北秩父西は信濃へ赤とんぼ
嶺に雲盆地の底の残暑かな
絵手紙に訃の報せあり白桔梗

粕屋 長 憲 一

共に老い妻を手つだふ土用干
月のせて稲田に水の流れ来し
甚平や運転免許返上す
ずぶ濡れの手締めをもつて山笠^{やま}終る
手締してたちまち山笠を解きにけり

須 惠 苑 実 耶

蛇消ゆるまで息も歩も止めにつり
かたつむり展望台に置いて行く
初産の子の大荷物帰省せり
相性はぴつたりの筈熱帯夜
家相など役には立たぬ西日かな

福 岡 山 内 碧

雨音やつるりつるりと辣蕪剥く
直会の男等去りし後西瓜
大祓終へたる祢宜の博多弁
青蘆やどの部屋も風吹き抜けて
均らされし畑広々と秋茜

熊 本 松 田 明 子

夕顔のひらく時刻にゆきあはず
夕顔の璧の艶めく薄暮かな
夕顔の一輪に闇さだまりぬ
闇まとひ夕顔一輪づつひらく
夕顔のひらき昨日を遠くする

糸 島 小 林 朱 夏

盂蘭盆会海人は灘へと手を合はす
一生を飼はれて終る虫の声
小鳥来る嘴いつも動かして
校長の庭の毬栗ころがり来
紅葉の祖母傾山を縦走す

福岡 樋口みのぶ

寝返りを打ちても故郷遠蛙

夏萩や標に近道まはり道

花カンナ母と握手で別れけり

さはやかや母校に明治の訓残り

墓守の見上げてゐたる银杏の実

福岡 栗原京子

琵琶の音が朝顔からむ小窓より

向日葵や見つめらるれば笑み返す

お茶を乞ふ声太き客夏座敷

本堂に香水幽か夕勤行

蠟燭が獄卒照らす暑き夜

福岡 田代貞枝

中空に銀のレリーフ赤とんぼ

堀川の一隅清し秋の鷺

秋しぐれ遠き過去置く京町屋

百年の梁より大蛇落ちたると

花カンナ地蔵に軽く会釈して

福岡 吉村摂護

新涼や薄れてきたる蒙古斑

秋立つや草の蔽ひし操車場

かすれたる声も鈴虫鳴きはじむ

大雨の夜の鈴虫が沈黙する

心太突く手をぐつと押し返す

東京 山田 正子

蝉しぐれ国破れし日遠くなり
新生姜溢るる水で洗ひけり
蓮の葉の水玉風に遊ばれし
数珠玉の生まれたてなるうすみどり
露草やきのうは鳴りしみすぐるま

行橋 安武 晨子

菊の白終の儀式となる人へ
笑み消えしかんばせ菊で埋めけり
生涯を終へたる人へ菊白し
病持つそれぞれに秋深みゆく
落し水斯かるところに標べ石

大阪 青木 朋子

夏草やときをり覗く猫の顔
蜘蛛の囿をくぐりて空に干すシート
一斉に赤くはならぬトマト挽ぐ
顔あげて胸より走る蜥蜴かな
峰雲の並び立つたり県境

東京 古川 夏子

熱帯夜銀朱の月の浮びをり
噴水や鳥舎の網の真新し
胡桃の実拾ふ鳥獣保護地域
櫛塚の薄暗がりや水澄めり
藪茗荷杵打つ音の水車小屋